様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月　3 日現在

機関番号：３４３１１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2008～2011
課題番号：２０５３０５７７
研究課題名（和文）社会・経済変動と家族観の変容のメカニズム ：文化的発達研究の理論化に向けて
研究課題名（英文）
Mechanisms of the “Family” conceptions reflected socio-economic changes: A quest for the theory of cultural developmental research
研究代表者
塘　利枝子（TOMO RIEKO）
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号: 00300335

研究成果の概要（和文）：
日本・韓国・中国・台湾の 1950～2010 年の小学校教科書に描かれた「家族」について、育児行動、親役割、家族内葛藤の観点から分析し、社会・経済の変動に伴う家族観の変容メカニズムについて考察した。また各国・地域の年代毎の教師に対する質問紙調査から、教科書に顕れた家族観と個人の家族観との関連性について分析した。これらの分析の結果、育児行動や親子関係に関する家族観の変化と、各国・地域毎の社会・経済変動の時期や内容との関連が示唆された。

研究成果の概要（英文）：
A comparative study in elementary-school textbooks’ contents as well as questionnaires to teachers of Japan, Korea, China and Taiwan from 1950 to 2010, which is based on the viewpoints of family concepts represented by rearing behaviors, roles of parents, and conflicts in family, suggested that the changes in mother’s and father’s rearing behaviors and their family concepts are closely related to socio-economic policies and structural changes of those countries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：発達心理学・文化心理学
科研費の分科・細目：心理学・社会心理学
キーワード：文化変容、社会変動、教科書、家族観、発達、経済変動

１．研究開始当初の背景

(1)家族と社会・経済変動

家族は各国・社会の中で、夫婦、親子、きょうだいなどの血縁関係による社会構成の基本単位であり、多くの社会や時代において次世代を育てる機能を担ってきた。しかし家族の機能や家族内の成員の位置づけ、役割、そして家族内でなされる子育てのあり方な

ど、家族がどうあるべきかという家族観は、時代とともに少しずつ変わりつつある。このような変化はどのようなメカニズムで起こるのだろうか。本研究では各国、各時代の家族観の変容と、社会・経済変動との関係を分析し、変容のメカニズムについて、文化発達的な観点から考察する。

個人の社会・経済変動と家族観との関係は、東・柏木編(1999)、清水・菰渕編(1999)などにより研究が行われてきており、近年の社会・経済変動が、人々の家族観や家族のあり方に及ぼした影響について論じられてきた。またBronfenbrenner (1979)も文化・社会・経済変動が個人の発達に影響を与えることを指摘した。しかし、社会・経済変動やそれに伴う産業形態、政治形態の変化が、社会全体で共有されている家族観に対して、どのように、どの程度の時間差で影響を及ぼしたかといった、変容のメカニズムまでは分析されてこなかった。

また近年特に歴史研究では、近隣の東アジア諸国と日本との関係が取り上げられているが、発達心理学研究の中では、隣国との歴史的な関係や、それらの関係の中で変化する各国の社会・経済的な状況と、人々の価値観との関係についてあまり論じられてこなかった。そこで本研究では、東アジア諸国に焦点を当て、各国の第二次大戦以降の社会・経済的な歴史的変遷と、その中で構築されてきた人々の家族観の変化との関連性、及びそのメカニズムを明らかにし、文化的発達研究の理論化に向けて種々の事柄を整理する。

(2)教科書分析の意義と本研究の特徴

教科書は各国・地域の大人が子どもに与える教材として、学校教育の中で重要な位置を占めており、教科書には次世代に期待する価値観が投影されていると考えられる。しかし異文化間比較は概して同一時代の異なる社会・文化間比較か、時代間比較のどちらか一方であり、両方の比較を同時に取り上げて、社会・経済状況の違いや社会変動との関連性の視点から取り上げた研究はほとんどない。Elder(1974)が指摘しているように、社会・経済変動は子どもの価値観に大きな影響をもたらす。これらの研究を踏まえ、塘(2005)では、国家間の比較とともに、通時的な比較を行ってきた。その結果、東アジアの隣国同士の間ですら、子ども観や家族観が異なっていることが指摘された。

本研究では以上の知見をさらに発展させ、家族観の違いをもたらしている社会・経済変動と人々の家族観との関係性や、家族観の変容のメカニズムを明らかにする。具体的には1950～2010年までの60年間を10年毎に区切り、各年代の４ヶ国の教科書に投影された家族観を分析した。本報告書は特に、どの国・地域もすべての翻訳と分析が終了している1950～2000年の50年間に焦点をあてて報告するとともに、2010年の分析についても補足的に記述する。

さらに教科書という特性上、そこに描き出された家族観は、社会全体で共有されたいわば理想像である。しかし社会全体で共有されているからといって、個人の家族観にも同じ傾向が見られるとは限らない。社会全体で共有された家族観と、個人が持つ家族観との関係性を分析する必要がある。

以上により、本研究では、①東アジア４ヶ国の社会・経済変動と、各国・地域全体の家族観との関係性、②各国・地域全体で共有する家族観と、各世代の個人の家族観との関連性について、教科書の内容分析と、20～60歳代に対する質問紙調査を用いて明らかにする。

２．研究の目的

(1)社会・経済変動と教科書に描かれた

家族観との関係性

東アジア４ヶ国・地域（日本、韓国、中国、台湾）の教科書に投影された家族観に焦点をあて、国家・地域間比較と、1950～2000 年を 10 年刻みにして分析する通時的比較の両手法を用いて分析する。一定期間異なる社会体制下に置かれた中華人民共和国と台湾、そして異なる産業形態や就業形態のもとで発展してきた台湾と韓国、第二次大戦後異なる戦争の歴史を経験した日本と他のアジア諸国など、東アジアの４ヶ国・地域は隣国同士影響を与え合いながらも、異なる速度で経済発展を遂げて来た。このような経済発展や社会変化の違いが、社会全体で共有する家族観に与えた影響を考察する。第二次大戦後に各国・社会の家族観は急速に変化したと言われているが、東アジア４ヶ国・地域のマクロシステムにあたる政治・社会・産業形態との関連性を調べ、社会のあり方や変化と、人々の価値観との関係性について分析する。

(2)各国・社会が共有する理想の家族観と、各世代の個人の家族観との関係性

質問紙調査を通して、本研究で対象とする教科書を使用して育った 20～60 歳代のコホート分析を行う。個人が抱く家族観は、社会全体が共有する家族観とは異なることがある。各個人は自分のライフコースの過程で様々な個人的な経験から、個人特有の家族観を持っている。特に本研究では子どもの家族観に教室場面で大きな影響力を与える教師に限定し、個人の年齢や、文化的な自己のあり方の認知に焦点をあて、各世代における社会全体で共有される家族観と、個人特有の家族観との関連性を明らかにする。

３．研究の方法

(1)小学校教科書の内容分析研究

1950 年、1960 年、1970 年、1980 年、1990 年、2000 年に出版された東アジア４ヶ国・地域（日本、韓国、中国、台湾）の小学校１～３年生用の国語教科書に描かれた家族像を、通文化･通時的にχ^2検定等の統計的検定を用いて比較分析する。

(2)質問紙調査

日本、中国、台湾の 20～60 歳代の各世代の幼稚園や小学校教師が抱いている実際の人々の家族観について、教科書に掲載されている作品の中から、家族内葛藤を扱ったものを厳選し、登場する親子の行動評価や自分が実際に取る行動を通して親子関係の価値観に対する変化を年齢や性別、そして文化的自己の違いの観点からその関係性について統計的に分析する。

以上２つの研究方法で行った分析結果に対して、東アジア４ヶ国・地域の社会状況、政策、経済状況、産業構造の変化を重ね合わせ、社会全体で共有された理想像としての家族観と、そこで生きる各世代の個人がどのように理想像を取り込み自身の家族観を構築していくか、それらの関連性について明らかにする。

４．研究成果

(1)社会・経済変動と教科書に描かれた家族観との関連性

①親役割の変容

1960～2000年の40年間における家族内の親役割の変容について、10年毎に区切り、日本、韓国、中国、台湾の教科書に描かれた親の育児行動を分析した。分析対象作品は４ヶ国・地域合計で1,974件であった。育児行動を「実際的な世話」「しつけ」「知識の授与」「心理的な世話」の４つに分類し、(a)育児行動を担う父親と母親の出現率の変化、(b)父親の育児内容の変化、(c)母親の育児内容の変化につ

いて、４ヶ国・地域の時代間の比較分析を行い、各国・地域間の共通点と相違点について分析した。その結果、家族内の父親の位置づけが50年間で変化している点は４ヶ国・地域とも共通であった。相違点としては、(a)父母の出現率については、日本と中国では有意な変化は見られなかったが、韓国では1980～2000年に父親の出現率が増加し、台湾では1980～2000年に有意に減少した。(b)父親の育児内容の変化では、日本において1960～1980年に「実際的な世話」が有意に減少する一方で、「知識の授与」は1960～2000年にかけて有意に緩やかに増加した。韓国では1980～2000年に「実際的な世話」が有意に減少する一方で、「知識の授与」は有意に増加した。中国では1960～1980年に「しつけ」が有意に減少する一方で、「知識の授与」は有意に増加した。台湾では1960～1980年に「実際的な世話」が有意に増加した。(c)母親の育児内容の変化では、日本において1960～1980年に「実際的な世話」が有意に減少したが、1980～2000年にかけては有意に増加した。韓国では「実際的な世話」が有意に緩やかに増加する一方で、1960～1980年に「知識の授与」は有意に減少し、1980～2000年に「心理的な世話」は有意に減少した。中国では1960～2000年に「実際的な世話」が有意に緩やかに減少した。台湾では1960～2000年にかけては特徴的な変化は見られなかった。

以上の結果と各国・地域や各時代の社会・経済状況や社会施策とを照らし合わせると、父親と母親の育児内容の変化に及ぼす社会・経済的な要因は類似点も見られたが、親の性別によって変化に対する影響力の強さが異なっていた。父親の育児内容の変化に及ぼす要因は(a)産業構造の変化の時期、(b)社会における企業規模の違い、(c)高等教育進学率の増加の時期の違い等が影響を与えているのに対して、母親に対しては女性の就労状況や保育施策の変化の時期の違いが、育児内容の変化の時期に影響を与えていた。また父親の育児内容には４ヶ国・地域共通のものが見られなかったのに対して、母親の育児内容に関してはどの時代の４ヶ国・地域においても「実際的な世話」の割合が多かった。すなわち母親役割については、どの国・地域でも「母親は第一養育責任者」であるという一定の固定的な役割イメージが存在し続けていると思われる。それは2010年の教科書でも同様であった。但し、「実際的な世話」の減少については、父親以上に女性の就労状況や保育施策といった子育てに直結した社会状況や施策が、母親の育児内容の変化に関与していると推測される。

②家族内の葛藤に関する変容

1950～2000年の50年間における家族内の成員間葛藤の変容について、日本、韓国、中国、台湾の教科書に描かれた家族を分析した。分析対象作品は４ヶ国・地域合計で6,887件であった。家族内葛藤の分析観点として(a)葛藤相手、(b)葛藤の起因者、(c)葛藤の受け手の対処行動、(d)最終的な葛藤解決に焦点をあて、家族内の葛藤に投影された親子関係の変化について各国・地域の時代間の分析を行った。その結果、４ヶ国・地域とも親子間葛藤に時代的な変化が見られ、親子関係が時代と共に上下関係から対等関係へと移行していた点では共通していた。しかし移行の時期は異なり、日本の親子関係の変化は他の３ヶ国より先行してみられ、その境目は1980～1990年に見られた。また1970年までは葛藤の起因者が子どもであることが多く、その背景にはトラブルを起こすのは子どもであるという社会の共通の価値観があったと思われる。それに対して、1990年からは親が葛藤の起因者になる例も見られるようになってきた。また1980年を境に

きょうだい間葛藤が少なくなるとともに、1990年の「1.57ショック」を境に、少子化傾向という社会現象が教科書に描かれた家族にも反映されるようになってきた。さらに日本の少子化は他の国・地域とは異なり、親子関係を変えただけではなく、親の意識をも変化させた。一方、韓国や台湾では親側ではなく、少子化現象は親に対する子どもの態度の変化に影響を与えたと推測される。また中国では他の３ヶ国・地域に比べて、特に国家政策が親子関係に影響を与えていた。例えば他の３ヶ国・地域でも少産化政策や多産化政策などが行われており、教科書に反映された親子関係はそれらの政策に影響を受けてはいる。しかし他国・地域のそれらの政策の効果に比べて、中国の「一人っ子政策」は親子関係の変化に、より強い影響力を持っていたと推測される。

(2)各国・社会が共有する理想の家族観と、各世代の個人の家族観との関係性

教科書に描かれた作品の中から家族内葛藤に関するものを選び、そこに登場する親子関係に対する４ヶ国・地域の教師の評価について、国、年齢、性別、文化的自己の観点から階層的にχ^2検定を行った。その結果、国家間や年齢（勤続年数）において有意な主効果は見られたが、各国内・地域毎の年齢や性別の違いは見られなかった。すなわち国家・地域を越えた時代的な変化が家族内葛藤には存在すると思われる。そしてその方向は親が子どもをコントロールするという権威的な行動の肯定から、対等でやさしい親子関係へと変化していった。

一方で国家・地域間にも一定の違いが見られた。例えば親に対して、葛藤場面における自己表出の程度に異なる傾向が見られた。中国や台湾では親の言うことに子どもは基本的に従う傾向が日本より見られたが、自分が正しいと思ったときには自分の意見をきちんと言って話し合うことに高い評価をおく傾向もあった。一方、日本では不満や自分の思いをあいまいにしたり、相手を強く問いつめない親子関係を良しとする傾向が見られた。

以上の結果と各国の社会状況とを照らし合わせてみると、教科書自体の時代間分析によって影響を与えているとされた少子化という社会現象は、個人の価値観にも影響を与えていた。そして教科書に描かれている理想像の変化より前倒しされて人々の価値観が変化している傾向が見られた。

今後の研究の方向性としては、2010年出版の教科書分析を再度精査し、本研究で得られた成果のさらなる検証をした上で、文化的自己観の違いと時代の先取りの早さとの関係性について検証する。そして、家族観の変容と社会・経済変動とのメカニズムについてより細かく分析する予定である。

文献

東洋・柏木惠子（編）1999 流動する社会と家族I:社会と家族の心理学　ミネルヴァ書房

Bronfenbrenner,U. 1979 The Ecology of Human Development:Experiments by nature and design, Harvard University Press.

Elder,G.H. 1974 Children of the Great Depression: Social change in life experience, University of Chicago Press.

清水由文・菰渕緑（編）1999　変容する世界の家族　ナカニシヤ出版

塘　利枝子（編）2005　アジアの教科書に見る子ども　ナカニシヤ出版

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 塘　利枝子・川口陽子、日仏の国語教科書に描かれた親子間の葛藤処理方略、同志社女子大学『現代社会フォーラム』、7号、40-53、(2011)、査読有

② 塘　利枝子、生涯発達における文化間移動―青年期までのアイデンティティ形成を中心にして、異文化間教育、31 号、19-32、(2010)、査読無

〔学会発表〕（計１１件）

① 塘　利枝子・金　娟鏡、東アジアの教科書に描かれた家族観の変容メカニズム、日本発達心理学会第 23 回大会、2012 年 3 月 10 日、名古屋国際会議場

② Tomo,Rieko・Lin,YiFang・ KIM,Yeonkyeong・GAO,Xiangshan 、Cultural Comparison of Solution Style displayed in Japanese, Chinese, Korean and Taiwanese School texts、The 9th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology 、12th European Congress of Psychology 、2011 年 7 月 30 日、Yunan Convention Center.

③ Tomo, Rieko 、Cultural Comparison of Solution Style displayed in Japanese, French and German School texts、12th European Congress of Psychology 、2011 年 7 月 7 日、The Istanbul Convention & Exhibition Centre.

④ 塘　利枝子、日本的小学校教科書及指導要領的発展 (Textbooks and curriculum development of elementary school in Japan)、教科書百年演進國際學術研討會（International Conference on Textbook Development）、2011 年 6 月 11 日、國家教育研究院 臺北院區國際會議廳

⑤ 塘　利枝子・金娟鏡・高向山、東アジアの教科書に描かれた親役割の変容メカニズム、日本発達心理学会第 22 回大会、2011 年 3 月 25 日、東京学芸大学

⑥ 塘　利枝子・金娟鏡、教科書に描かれた日本と韓国の親役割の変化―育児をめぐる社会状況は親役割の理想像にどう反映するのか、日本教育心理学会第 52 回総会、2010 年 8 月 27 日、早稲田大学

⑦ 塘　利枝子・鄭任智、社会・経済変動と家族観の変容―日本と台湾の教科書に見る子ども、発達心理学会第 21 回大会、2010 年 3 月 28 日、神戸国際会議場

⑧ 塘　利枝子、社会経済変動と期待される自己との関係性(2)―1950 年から 2000 年の台湾の教科書に描かれた「いい子」像の変容、日本心理学会第 73 回大会、2009 年 8 月 26 日、立命館大学

⑨ 塘　利枝子、社会経済変動と期待される自己との関係性―1950 年から 2000 年の教科書に描かれた「いい子」像の変容―、日本心理学会第 72 回大会、2008 年 9 月 21 日、北海道大学

⑩ Tomo,R.、“What is family?” in Four East Asia: Cultural Comparison of “Family” displayed in Japanese, Korean, Chinese and Taiwanese textbooks 、XXIX International Congress of Psychology (ICP)、2008 年 7 月 24 日、ドイツ（ベルリン）

⑪ 塘　利枝子、日本・韓国・中国・台湾における「子どもを預けること」への価値観―国と世代間の比較―、日本保育学会第 61 回大会、2008 年 5 月 18 日、名古屋市立大学

〔図書〕（計５件）

① 塘　利枝子、東アジアの教科書に描かれた自己表出、榎本博明編著『自己心理学の最先端―自己の構造と機能を科学する』、あいり出版、(2011)、総ページ数 315 頁、分担部分 241-254 頁

② 塘　利枝子、世界の教科書にみる家族、柏木惠子編著『よくわかる家族心理学』、ミネルヴァ書房、(2010)、総ページ数 217 頁、分担部分 22-23 頁

③ 塘　利枝子、自分自身を知る―自己の発達、向田久美子・石井正子・繁多進編著『新 乳幼児発達心理学―もっと子どもがわかる好きになる』、福村出版、(2010)、総ページ数 197 頁、分担部分 61-71 頁

④ 塘　利枝子、教科書に描かれた発達期待と自己、岡田努・榎本博明編『パーソナリティ心理学へのアプローチ』、金子書房、(2008)、総ページ数 215 頁、分担部分 148-166 頁

⑤ 塘　利枝子、社会・経済変動と家族―教科書を通してみた家族の変化、柏木惠子監修・塘　利枝子他編『発達家族心理学を拓く―家族と社会と個人をつなぐ視座』、ナカニシヤ出版、(2008)、総ページ数 200 頁、分担部分 97-111 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

塘　利枝子（TOMO　RIEKO）

同志社女子大学・現代社会学部・教授

研究者番号：00300335

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：